

2021年1月6日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 池田 寛人
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 抑うつに対する、心配と反すうの個別性に着目したメタ認知療法的理解
論文題目（英文） A Metacognitive Therapeutic Understanding of Depression, Focusing on the Individuality of Worry and Rumination.

公開審査会

実施年月日・時間 2020年12月6日・9:30-10:30
実施場所 Zoomにて実施

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	田山 淳	博士（障害科学）	東北大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	大月 友	博士（臨床心理学）	広島国際大学	臨床心理学

論文審査委員会は、池田寛人氏による博士学位論文「抑うつに対する、心配と反すうの個別性に着目したメタ認知療法的理解」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 **コメント：**中間報告会から半年間の間で、結果の整理によく取り組んだ。この間の取り組みは評価に値するものである。

1.2 **質問：**研究2-2で使用された認知課題では、ニュートラルなディストラクター刺激を提示している。このディストラクター刺激はどのように機能していたと考えられるのか。

回答：先行研究通り、ターゲット以外に余分な刺激が提示されたことで、認知的な障害が生じていたと考えている。

1.3 **質問：**研究3-2の心配と注意バイアスの結果に関して、反応時間ではなくエラー数との間で有意な相関が得られた結果について、どのように考察しているか。

回答：抑うつ傾向者を対象とした先行研究では、注意バイアスの測定において、認知資源が圧迫されることでエラー数が増加する傾向が示されている。本研究でも抑うつ傾向者を対象としたため、心配とエラー数の関連が示された可能性が考えられる。

- 1.4 **質問：**抑うつ傾向者のクラスタ分析の結果、3群に分かれることが示されていたが、各群のアウトカムはどのように違っていると考えられるか。

回答：心配・反すうのどちらも高い群、心配だけが高い群、反すうだけが高い群に分かれたが、どちらも高い群は、他の群よりも抑うつ得点が有意に高く、アウトカムも悪くなる可能性があると考えられる。

- 1.5 **質問：**注意制御機能が下位処理ユニットではなくS-REFユニットに位置付けられる理由は何か。

回答：注意制御機能の能動的な側面から、オンライン処理を担う階層として説明されるS-REFユニットに位置づけられるものとして説明が可能だと考えた。

- 1.6 **質問：**研究3-2の注意バイアス課題に関して、刺激選定はどのようなプロセスを経て行ったのか。

回答：先行研究で、情動価の確認手続きがなされている刺激リストを使用した。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 研究2-2、3-1の認知課題におけるディストラクター刺激としての機能について、どのような機能を事前に想定していたのか記載すること。
- 2.1.2 補足的検討におけるクラスタ分析の結果について、各群のアウトカム指標はどのように違っていると考えられるか、考察を追記すること。
- 2.1.3 注意制御機能をS-REFユニットに組み込むことができる理由について、明確に記載すること。
- 2.1.4 研究3-2の注意バイアス課題における、先行研究での刺激の選定プロセスについて記載すること。
- 2.1.5 補足的検討におけるクラスタ分析の結果について、各群の心配・反すう得点を本文中でも記載し、どのような群に別れていたのかについて考察を記載すること。
- 2.1.6 研究3-1と研究3-2で、各研究で使用した課題のエラー指標と心配の相関が、逆の結果になっていることについて、考察を記載すること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 研究2-2、3-1で使用したディストラクター刺激の機能として、想定した機能を第4章、第5章に加筆した。
- 2.2.2 補足的検討におけるクラスタ分析の結果について、心配と反すうのどちらも高い抑うつ傾向者が、最も抑うつ症状が強くなる可能性について明示するために、補足的検討に加筆した。
- 2.2.3 注意制御機能をS-REFユニットに組み込むことができる理由について明確にするために、第1章に加筆をした。

- 2.2.4 研究3-2の注意バイアス課題における、先行研究での刺激の選定プロセスについて第5章に追記した。
- 2.2.5 補足的検討におけるクラスタ分析の結果について、各群の心配・反すう得点を本文中でも記載し、どのような群に別れていたのかについて補足的検討に考察を追記した。
- 2.2.6 研究3-1と研究3-2で、各研究で使用した課題のエラー指標と心配の相関が、逆の結果になっていることについて、第5章で考察を追記した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、情報処理プロセスの統合的理解に基づいて作成された S-REF モデルにおいて、能動的に注意を制御する機能と注意バイアスの違いを整理し、心配と反すうのそれぞれに関連する注意の問題が異なる可能性を検討することによって、抑うつ傾向者を個別に理解することを目的として明確に設定している。この目的は、抑うつ傾向者に対する個別的な心理的アプローチを拡張する可能性を示唆し得る点から、臨床心理学研究として妥当であると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究では性質の異なる注意の働きをそれぞれ測定するのに妥当だと考えられた認知課題を使用し、実験を行っている。結果として、抑うつ傾向者の心配と反すうに関連する注意の働きが異なる可能性について、一定の結論を得ている。したがって、本研究の方法論は明確かつ妥当だと考えられる。なお、本論文で実施した実験の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を取得し（研究 1：2015-028、研究 2-1：2017-030、研究 2-2：2017-048、研究 3-1、3-2：2016-038）、実験の前には参加者に対して実験内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本研究の成果は、抑うつ傾向者の反すうには能動的な注意制御機能の低下が伴う一方、抑うつ傾向者の心配では脅威的な刺激が提示された場合にのみエラーが増加するなど注意バイアスが問題であり、心配と反すうでは関与する注意の問題が異なる可能性を示している。これらの知見は、先行研究と照らし合わせても、抑うつ傾向者の個別的な理解を拡張する成果として妥当であると考えられる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 先行研究では、抑うつの情報処理プロセスをまとめた S-REF モデルのなかで、注意制御機能の低下と、注意バイアスの違いは特に説明されてこなかった。本研究では両者の違いを理論的に理解し、結果において明確に示した点で、独創的だといえる。
 - 3.4.2 先行研究では、抑うつ傾向者の心配と反すうの個別性については十分な検討がなされておらず、総合的な議論を行うことが出来なかった。本研究では両者にそれぞれ関与する注意の問題に着目し、結果において明確な違いを示した点で、既存の枠組みを拡張する新規性を有すると考えられる。

- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
- 3.5.1 本研究でS-REFモデルにおける注意制御機能と注意バイアスの違いについて、理論的に考察を行い、それぞれの位置づけについて整理を行うことが出来た点は、学術的理解を深めるものである。また、S-REFモデルは病理モデルであり、臨床心理学的支援に役立つ知見を提供している点で有意義であると考えられる。
- 3.5.2 抑うつ傾向者の心配と反すうに関して、関連する注意の問題が違っている可能性を示唆したことには、学術的意義がある。さらに、個々の抑うつ傾向者においてどちらが強いか異なっている心配と反すうそれぞれの特徴に基づいて、効果が期待できる介入が異なる可能性を示唆できたことで、臨床心理学的支援に役立つ知見を提供している点で有意義であると考えられる。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 抑うつ傾向者に対する心理的介入において、個別的な理解は必要不可欠であるといえる。この個別的な理解に関して、先行研究に対して発展的な知見を提供することができた点は、心身の健康と生活の質の向上を目指す人間科学に貢献するものである。
- 3.6.2 本研究が基盤としたメタ認知療法は、認知・行動療法の伝統に則りながら認知心理学などの知見を取り入れ、発展してきたという点で、複眼的に人間を捉える人間科学の流れに沿うものである。その理論的拡張に貢献し得る知見を提供できた点で、学際的な人間科学の発展に資することができたと考えられる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・池田寛人・宮崎球一・松野航大・根建金男：2017 大学生における、心配の影響を含めた抑うつのメタ認知モデルの作成. 行動医学研究, 23 巻 1 号, 24-31 頁.
- ・池田寛人・梅田亜友美・藤島雄磨・松野航大・高橋恵理子・熊野宏昭：印刷中 メタ認知療法における抑うつと心配、反すうに対する実行機能の影響. 行動医学研究.

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上